

# 『We Can!』 デジタル教材の効果的な活用に関する実践研究 —“My Summer Vacation”の単元に着目して—

佐藤 裕子\*・染谷 藤重\*\*

(令和元年8月30日受付；令和元年12月2日受理)

## 要 旨

本研究の目的は、『We Can! 2』の“My Summer Vacation”の単元を通して、デジタル教材の効果的な活用と指導法についての提案を行い、その実践結果の報告を行うことにある。参加者は6年児童156名で、“My Summer Vacation”のユニットに絞って実践した。データは、質問紙で行い、分析は記述統計量で処理した。その結果、多くの児童が電子教材を使った英語の授業に好感を持っていることが分かった。効果的な指導法により、児童が電子教材での歌や発音の楽しさをより実感していることも分かった。

結論としてデジタル教材の良さを生かすために事前事後のフォローが必要なことが分かった。授業のねらい達成に向けていかにデジタル教材を有効に活用できるかということが確認された。デジタル教材だけを見せることが目的となつてはいけない。課題として、児童の実態に合わせたデジタル教材を活用するなど、教員がデジタル教材の効果と課題を認識することが示された。

## KEY WORDS

ICT Materials：ICT教材，Foreign Language in Elementary Schools：小学校外国語，Learners：学習者  
Motivation：動機づけ，Practical report：実践報告

## 1. はじめに

2020年より小学校5，6年生において外国語（英語）が教科となり，年間70時間英語の授業が行われることとなる。また，3，4年生においては外国語活動の授業が年間35時間行われることになっている（文部科学省，2017a）。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）』改訂前は，5，6年生においては，*Hi, friends! 1・2*や*Hi, friends! Plus*などの副読本が配布され，90%以上の小学校で*Hi, friends!*を用いて授業が行われてきた（日本英語検定協会，2013）。しかし，小学校において，外国語活動の必修化とともに，電子黒板やプロジェクターなどのICT機器の充実が叫ばれ，多くの小学校にICT機器が設置されてきた（日本教育情報化振興会，2014）。しかし，*Hi, friends!*の付属のデジタル教材の使用率は，55.8%と低いことが報告されている。柴山（2018）は，小学校教員を対象とした授業におけるICT活用の課題についての問いに対し，「機器の準備時間」や「教材研究の時間」等の「準備時間」の課題が上位にあがっていると言及している。

現在，外国語（英語）で用いられている副教材*We Can! 1, 2*及び外国語活動で用いられている*Let's Try! 1, 2*は，すべての単元において，電子教材が用意されており，小学校の教員は，それらの教材を適切に使うことが求められている。そこで，本稿では，小学校5，6年生の外国語（英語）に焦点を絞り，*We Can!*の効果的な指導法を提案するとともに，その指導法による授業を受けた児童の情意面についても検討を行っていく。

## 2. 先行研究

前述のICT活用に注目しながら，小学校英語におけるデジタル教材の活用に関する研究を概観する。2011年から英語必修化に伴い，担任が授業を進めるための補助教材として文部科学省より『英語ノート』（2007）が配布された。柳（2009）は「メディア（ICT）の利用は効果的な授業を展開するためには欠かせない，教師の負担を軽くし，臨場感のある言語使用場面を児童に与える助けになる」と述べている。國本（1988）は，高学年になるとピアジェが示した「形式操作期」に入り，分析的思考を持つようになるため，これまで低学年・中学年の総合的な学習の時間などで行われてきたゲームや歌，チャンツなどだけでは，高学年児童の知的好奇心を満たすことが困難となると述べてい

る。そこで、高学年を対象とした、知的好奇心を満足させる教材が必要となってくる。さらに、文字を利用した学習にも興味を持つようになると言われている。山本(2010)は、新潟県N小学校6年生23人に対して、国際交流を行うにあたり、マルチメディア教材を提供することで、英語の読み書きに興味を持ち始めた子どもの英語学習への動機づけを比較調査方法で調べた結果を報告している。子どもの国際交流のプロジェクトに、開発したPC学習システムを導入した結果、交流前に比べ交流後「英語の読み書き練習したい」と日本の小学生(5, 6年生)の英語学習に対する学習意欲が高まったことを検証できたと述べている。

また、教育の効率化、児童・生徒の授業参加を促進するために電子黒板で指導する事例が報告されている(小川, 2009)。管・梅本(2009)がA中学校第1学年266名に対して比較調査を行った結果では、デジタル教材を利用した場合に学習への動機づけが高まったことが報告されている。しかしながら、ICTの有効活用が進んでいく中、管・梅本(2009)は「『機械を使う人・機械に使われる人』にならないことだ。教員はあくまで活用する人である。機械を動かす人になっては本末転倒である」と述べている。

2012年4月より*Hi, friends!*が小学校外国語活動のテキストとして全国の国公立の小学校に文部科学省著作物として配布された。加藤ら(2016)は、*Hi, friends!*デジタル教材に焦点を絞り、言語学、音声学、文学、異文化理解、コミュニケーション能力、そして小中連携の6つの視点からその評価を試みた。*Hi, friends!*デジタル教材は、外国語活動の授業において教師が外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみの活動に割く時間を長くし、言語や文化についての体験的な理解を促す活動に割く時間を短くすることを導く教材であると述べている。

これまでの研究は、英語授業で使用されるICT活用の有効性やデジタル教材内容の評価はわかったが、具体的に授業の中でどう活用していくかまだ不十分である。したがって、さらなる課題として、デジタル教材を活用した効果的な指導に焦点を当てることが必要と考えられる。

### 3. 研究の目的

以上の問題意識を踏まえて、以下の2点を本研究の目的とする。

- (1) 具体的に“*My Summer Vacation*”の単元における効果的な指導方法とデジタル教材の活用方法についての提案を行う。
- (2) (1)の提案をもとに、筆者の勤務校の公立小学校第6学年の児童にデジタル教材を活用した授業実践を行い、その実践が、児童のデジタル教材に対する学習意欲にどのような影響を及ぼすかを明らかにする。

### 4. 研究方法

#### 4.1 参加者

本研究の参加者は、千葉県A市にある公立小学校であるB小学校の6年生全児童155名である。B小学校の児童は、平成19年度に文部科学省教育課程特例校として小学校1年生より教科として英語の授業を受けている(1年生から4年生は週1回20分、5年生では、年間35時間)。昨年まで、担任・ALT (Assistant Language Teacher)・JC (Japanese coordinator) (日本人コーディネーター: 英語授業プランや教材を作成)の3人体制であったが、今年度より英語専科(第一筆者)が入り4人体制となった。B小学校では、A市独自のカリキュラムに基づいた外国語(活動)が実施されてきたが、本年度より新たな取り組みとして副教材*We Can!* 1, 2を使用し、授業は週1.5時間年間50時間実施している。

#### 4.2 授業実践の内容

本研究では、*We Can!* 2のunit 5 “*My Summer Vacation*”において、デジタル教材を活用しての授業を実践した。本来、週2回70時間実施で全8時間計画となっているが、筆者の勤務校では週1.5回50時間実施のため全4時間でひとつの単元として扱った。この単元は、夏休みの思い出について伝え合う言語活動に取り組むことで、児童にとって聞いたり話したりする必然性を与えるとともに、過去形に初めて触れさせる単元である。単元目標は表1(文部科学省, 2017c, p.44)、指導計画は表2に示す通りである。

表1 単元目標（文部科学省，2017c，p.44）

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力，人間性等
夏休みに行った場所や食べた物，楽しんだこと，感想などを言ったり聞いたりすることができる。	過去の表現が分かり，夏休みに行った場所や食べた物，楽しんだこと，感想などを伝え合う。また，夏休みの思い出について簡単な語句や基本的な表現で書かれた英語を推測しながら読んだり，例を参考に自分の夏休みの思い出について話したことを，語順を意識しながら書いたりする。	他者に配慮しながら，夏休みの思い出について伝え合おうとする。

表2 指導計画と使用したデジタル教材 4時間扱い

時間	主な学習活動	使用したデジタル教材
1	・夏休みの思い出について話す。 ・行った場所，食べた物，楽しんだことなど夏休みに関わる語彙の確認をする。	・ Let's Chant 「Summer Vacation」の音声（歌）に合わせて発音する。 ・ Let's Listen 1 登場人物の夏休みの思い出について聞いて，線で結ぶ。
2	・夏休みに行った場所や食べた物，楽しんだこと，感想などを言ったり聞いたりする。 ・過去のことを表す表現に触れる。	・ Let's Chant 「Summer Vacation」の音声（歌）に合わせて発音する。
3	・夏休みの思い出について例文を参考に，自分の夏休みの出来事に関して発表カードに書く。	・ Let's Chant 「Summer Vacation」の音声（歌）に合わせて発音する。 ・ Let's Listen2 登場人物が夏休みにどんなことをしたのかを聞いて，線で結ぶ。
4	・友だちに自分の夏休みの出来事について紹介する。 ・発表会を開く。	・ Let's Chant 「Summer Vacation」の音声（歌）に合わせて発音する。 ・ Let's Watch and Think 2 映像を見て登場人物が夏休みにどんなことをしたのかを聞いて，表に書く。

先行研究で言及した通り，今後，デジタル教材の授業への導入は避けられない課題となる。そこで，上記の実践を行うために筆者が提案する効果的にデジタル教材を用いるための基本的な5つの方針を以下に記述する。

基本方針1) デジタル教材は，繰り返し音声に慣れ親しませた後に活用するようにする。児童のデジタル教材の内容の理解を促進し，聞くことができないという自己効力感の低下を防ぐ手立てを行う。

基本方針2) デジタル教材で出てくる初めての語とキーワードの語は，デジタル教材使用前に必ず確認させる。

基本方針3) 児童の実態や理解度に合わせて，使用するデジタル教材の内容を選択する。

基本方針4) デジタル教材とALTの発音と合わせて聞かせるようにする。デジタル教材は，音声の速さを調整できないので，児童が理解をしやすいようにALTにゆっくり発音してもらうようにすることを心掛ける必要がある。

基本方針5) 児童の実態や理解度に合わせて，デジタル教材の時間配分を考慮する。

上記の基本方針を，4時間扱いの単元「My Summer Vacation」の第2時間目の授業例を基に，詳細を記述する。

第2講時の目標は，「夏休みに行った場所や食べ物，楽しんだことについての簡単な語句や基本的な表現を聞いたと言ったりする」ことである。

## 【導入】

・あいさつ・リスニングクイズ（10分）

最初の10分間でウォーミングアップを図る。ここでは、毎回児童全員が担任や英語専科・ALT・JCと直接挨拶をするようにしている。Q：“How are you?” A：“I’m hot and hungry.”などのやりとりで、大きな声で発話することに慣れ親しませている。次に3ヒントで誰のことかを当てるリスニングクイズを実施している。児童の意欲や関心を高めるために、実施単元に関連した児童が興味を持つと考えられる題材を設定するようにしている。そして、ALTの質問や答えを全員で復唱し、話すことにもつなげている。

## 【展開1】

・過去を表す表現に触れる（10分）→基本方針1）2）

この活動では、児童が夏休みにしたことを思い出しながら、夏休みに関する語句を何度も聞いて理解することがねらいである。「夏休みに行ったこと」をデジタル教材に記載されたキーワードごとに発音練習をする。

- ①「～へ行った（I went to～）」
- ②「～を楽しんだ（I enjoyed～）」
- ③「～を食べた（I ate～）」

この時、児童の理解を促すために、日本語での「今」と「過去」の違いに気づかせる工夫を行った。日本語でも、「海へ行く」「つりを楽しむ」「アイスクリームを食べる」は、夏休みに体験した過去のこと、「海へ行った」「つりを楽しんだ」「アイスクリームを食べた」と語尾が変わることを確認した。そのことを踏まえて、英語でも過去の事項を表すときには、語尾が変化することに気付かせる工夫を行った。具体的に、“I eat ice cream.”→“I ate ice cream.”という文を、3回繰り返して発音の練習を行った。他のキーワード（e.g. I went to～；I enjoyed～）も同じく繰り返し練習を行った。ここで、英語の語尾が変わることの意味が分かっていなかったと思われる児童から「あっ、そうなのか」と「現在」と「過去」の時制の違いに気づいたような発言も見られた。

## 【展開2】

・デジタル教材“Let’s Chant”を使用した（10分）→基本方針3）4）5）

この場面で、デジタル教材を使用する。【展開1】で覚えた夏休みに関わる語彙をチャンツで繰り返し発音練習する。

“I went to the sea.”

“I enjoyed swimming.”

“I ate ice cream.”

などの1場面ごとに出てくる絵と文字に合わせて発音練習を行う。夏休みの場面が出てくるたびに自分の夏休みの内容を思い出すかのように、児童から「行った!」「自分も食べた!」などの発言も聞き取れた。デジタル教材における音楽がテンポよく流れるため、児童はリズムに乗って学習を行うことができた。デジタル教材の良い点として、速さが「ふつう」と「ゆっくり」の2段階から選べるようになっている。児童がチャンツのリズムに慣れてくると、児童の実態に合わせて主語や目的語を変えて練習を行った（e.g. He went to the mountain.）。特に、理解が難しい児童に配慮するために、デジタル教材で内容を聞いた後、ALTがゆっくり発音して意味や発音の確認をするという事項を心掛けた。児童が発話しにくい語（e.g. amusement park / grandparent’s house / shaved ice）はALTが繰り返し発音指導を行った。

## 【展開3】

・発表タイム（10分）→基本方針5）

デジタル教材を用いて、リズムに合わせて練習した後、夏休みに関する3つの文を全員が発表した。児童は、自分の夏休みの体験に合わせて文を選び、教室の隅にいる英語専科（第一筆者）・ALT・JCの前でそれぞれのセンテンスをひとつずつ言う活動を行った。英語専科が①「～へ行った（I went to～）」JCが②「～を楽しんだ（I enjoyed～）」ALTが③「～を食べた（I ate～）」を担当し、児童1人1人の発音とセンテンスを過去形で言っているかを確認した。eatとateは、特に間違えやすい箇所であるので、ALTが担当した。3つのセンテンスを全て言うことができるようになった場合、児童は4人の先生の前で発表を行い、すべてに成功した場合、合格シールをもらうことができた。このことにより、達成感に満たされた児童たちが多く存在しているように思われた。



## 【振り返り】

・授業を振り返る・終わりのあいさつをする（5分）。

最後に授業の振り返りを行った。英語専科がALTや担任に対して、“How was today's class?” と聞き、4段階で評価を行った。評価の段階としては、“Perfect, ” “Great, ” “Good, ” and “OK”の4段階であり、児童もそれぞれ自分の学習の様子を振り返って、どのように感じたかを考えるように指導した。ALTが大げさなジェスチャーで“Perfect!”と言うと、児童たちは非常に喜んでいる様子が見て取れた。この時に、毎回、なぜその評価を得られたかの理由をフィードバックするように心がけている。今回の場合は、「夏休みの思い出についての言葉を全員が言えたこと」と具体的がんばったことを評価した。パーフェクトシールをALTが担任に渡し、教室に掲示してもらった。自分達がんばったことを視覚化することによって、後日の授業に関する学習意欲を高めることが狙いである。

## 4.3 調査方法と時期

調査課題として次の3つを実施した。

- ①2018年4月時点でのアンケート
- ②デジタル教材に関するアンケート
- ③デジタル教材の自由記述に関するアンケート

回答者は6年生156名である。

①2018年4月時点のアンケートでは、デジタル教材を使用する前の実態として児童の英語への情意要因に関する調査を行った。アンケートの答え方で、クラス間に差が出ないように、直接、第一筆者が質問を行った。「英語の勉強は好きですか?」「英語の授業は楽しいですか?」の学習意欲（動機づけ）を問う質問、及び「1年前にくらべて英語が話せるようになりましたか?」「1年前にくらべて英語が聞けるようになりましたか?」と児童自身の1年間の成長をどのように評価しているか調査するためにこれら項目を入れた。

②電子教材に関するアンケートは、デジタル教材を使用しての児童の興味関心・理解度を知るために行われた。今後、デジタル教材を活用して授業を進めて行くために、児童がデジタル教材に対してどのように感じているのか、具体的にどのような内容を好んでいるかに関しての項目を含めて作成した。

③デジタル教材の自由記述に関するアンケートでは、児童のデジタル教材使用に当たっての効果と課題について調査する目的で行った。

## 5. 結果と考察

## 5.1 ICT（デジタル教材）活用前の児童の情意面に関する結果

表3には、2018年4月初め時点での児童の情意アンケートの結果を示す。アンケートは、4件法を用いており、4 = 「とてもそう思う」から1 = 「思わない」となっている。

表3 2018年4月時点での児童の情意アンケートの結果（N=156）

質問項目	Mean	SD	歪度	尖度
Q1：英語の勉強は好きですか。	3.15	0.743	-0.436	0.061
Q2：英語の授業は楽しいですか。	3.40	0.640	-0.455	-0.499
Q3：1年前に比べて英語が話せるようになったと思いますか。	3.01	0.827	-0.510	0.386
Q4：1年前に比べて英語が聞けるようになったと思いますか。	3.07	0.771	-0.293	-0.330
Q5：もっと英語を話せるようになりたいと思いますか。	3.34	0.799	-0.922	-0.096
Q6：日本以外の違う国について興味がありますか。	3.01	0.902	-0.561	-0.530

情意アンケートの結果、すべての質問に対し「平均値3」を超えた数値を示している。特に、質問項目の中でも「Q2：英語の授業は楽しいですか」と「Q5：もっと英語を話せるようになりたいと思いますか」の2つは特に高い数値を示している（Q2：M=3.40, SD=.64；Q5：M=3.34, SD=.80）ことが分かる。

## 5.2 ICT（デジタル教材）活用後の児童の情意面に関する結果

表4は、電子教材に関するアンケートの記述統計量を示している。

表4 電子教材についてのアンケート結果（記述統計量）（N=152）

質問項目	Mean	SD	歪度	尖度
電子教材を使った、				
Q1：英語の勉強は好きですか。	2.89	0.720	-0.487	0.407
Q2：英語の授業は楽しいですか。	2.93	0.672	-0.445	0.622
Q3：英語の授業はわかりやすいですか。	3.09	0.731	-0.557	0.264
Q4：英語の授業は役に立つと思いますか。	3.08	0.785	-0.806	0.657
Q5：電子教材を使った英語の授業は難しかったですか。	2.08	0.802	0.481	-0.080
電子教材を使った英語の授業で、どの程度好きか。				
Q6-1：世界の国の様子を知る。	2.99	0.789	-0.961	1.533
Q6-2：外国の友達の話を知る。	2.62	0.861	-0.247	-0.535
Q6-3：チャンツで歌う。	2.34	0.892	0.118	-0.730
Q6-4：リスニングで問題を考える。	2.93	0.859	-0.509	-0.317

電子教材についてのアンケートの結果、平均値が3に近い程、意識が高いととらえることができる。特に、電子教材を使った授業は、わかりやすく役に立つと考えていることが数値から判断できる。さらに、Q5の分析結果から、児童は、電子教材での授業をあまり難しいとは思っていないことが伺えた。電子教材の内容については「世界の国の様子を知る」「リスニングで問題を考える」ことに比較的に好感が高いことが分かる。

## 6. 総合的考察

本研究では、第一筆者の勤務する公立小学校において英語専科として指導しながら、昨年度配布された*We Can! 2*におけるデジタル教材の使用を通して、効果的な指導と児童の情意面に見られる変化を検討した。2020年度から、小学校5年生から外国語が教科化となりデジタル教材を使用することが必須であり、授業の中で効果的な指導のあり方に知見を得られたことに意味があると考え。以下、本研究で示された調査研究の考察とデジタル教材の効果的な活用および今後の課題についてまとめる。

### (1) 調査研究の考察

表3の4月時点で情意アンケート結果は、比較的高い好感度を示している。校内にALTが1週間常勤している環境や担任・ALT・JCの手厚い指導体制やA市独自の英語カリキュラムによる充実した学習内容などが理由として考えられるが、表3のアンケート結果から児童の英語へのモチベーションが高いことも良好な影響を与えていると考えられる。表4の電子教材についてのアンケート結果では、「電子教材を使った英語の勉強は好きですか。」は、4月の情意アンケート結果による「英語の勉強は好きですか。」に比べると高いとは言えないが、比較的多くの児童が電子教材を使った英語の授業はわかりやすく役に立つと思っている。それは、デジタル教材についての自由記述からも伺える。「My Summer Vacation」で、電子教材を使ってどう思いましたか」の質問にほとんどの児童が電子教材の良さを挙げていた。表5及び表6に、代表的な意見を記述する。

表5 電子教材の良さに関する自由記述

・音楽や動画があってわかりやすい。	・英語が前よりも楽しくなった。
・外国の友だちの話を知って問題を考えるのが楽しかった。	・音楽を流すことで授業が楽しくなった。
・チャンツは歌で覚えることで頭に入ってきた。	・電子教材を使うと発音がわかりやすい。
・コミュニケーションができるようになり、単語がわかるようになった。	・英語がもっと好きになった。

表6 電子教材の課題に関する自由記述

話のスピードが速くて会話や単語が聞き取れない。	発音が難しい。
歌の内容が難しい。	ALTが話した方が良かった。

文部科学省（2017d）において、学習への興味・関心を高める効果としてICTを活用できると述べられている。しかし、自由記述からもわかるように、電子教材では歌や発音が聞き取れず困っている児童がいることを忘れてはいけない。逆に電子教材に頼りすぎて英語嫌いを増やしてはいけないと考える。

## (2) デジタル教材の効果的な活用

文部科学省（2017d）は、ICTで日本語と英語の音声や文構造の違いに気づかせる指導に活用出来ると述べている。“My Summer Vacation”での現在と過去の表現との違いにチャンツなどの音声と視覚的な写真や文字の違いに気づかせる有効な働きをしていると考える。前述の授業実践でも述べているが、ただデジタル教材を授業の中で流すのではなく、授業の目標に向けていかに有効に活用できるかが重要となってくる。デジタル教材の良さを活かすために事前事後のフォローが必要である。事前に教材に出てくる語彙の確認と繰り返し耳に慣れさせることにより、児童は安心してデジタル教材の音声での聞き取りや発音練習を楽しむことができるのである。さらに、繰り返し練習したことを1人1人が自信を持って発表できるようになると、進んでコミュニケーションを図るようにつなげていくことができる。電子教材だけでは、発音が速くて聞き取れなかったり、理解できなかったりする児童のためにALTが発音の速さを調整しての協力が欠かせないと考える。

また、デジタル教材がどの程度好きかという調査結果から、リスニングが得意でない児童がチャンツを好んでいることから、チャンツを優先的に活用するなど授業内容の構成も配慮して進めて行きたいと考える。

## 7. 結論

ICT（デジタル教材）活用のポイントは、授業のねらい達成に向けていかにデジタル教材を有効に活用出来るかである。デジタル教材だけを見せることが目的となつてはいけない。そのためには、教員がデジタル教材の効果と課題を認識することが不可欠であろう。さらに、児童の実態や理解度に合わせて教材を選択し、授業の目的に向けた授業構成をしっかり立てることが大切である。その中でこそ、デジタル教材の効果が活かされると認識する。

今後、外国語教科化に向けて、児童がデジタル教材を活用して英語好きになっていくことを願う。

## 付記

1, 2, 3, 4, 6, 7章を第一筆者が、5章を第二筆者が執筆を行った。

## 謝辞

本研究においては、千葉県A小学校校長鎌塚恒明先生山田和隆先生始め職員の皆様にご協力いただいたことに感謝を申し上げます。また、同小学校の児童の皆様にも、アンケート調査に協力いただき心より感謝を申し上げます。

## 参考・引用文献

- 小川恵子（2009）. 「「スマートボード」を使った授業」『英語教育』第58巻第8号, p.23.
- 加藤茂夫・Carmen Hannah・本間伸輔・松沢伸二・成田圭市・岡村仁一（2016）. 「小学校外国語活動テキスト『Hi, friends!』デジタル教材の評価」『新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』9（1）, 43-64.
- 管正隆・梅本竜多（2009）. 『『英語ノート』対応電子黒板活用ガイドブック』東京：旺文社.
- 國本和恵（1988）. 関東甲信越支部：調査研究プロジェクト・チーム, 1999「子どもの言語習得と文字—日本の子どもの英語学習における文字の役割について」『日本児童英語教育学会紀要』21, 37-53.
- 柴山英樹（2018）. 『ICTを活用した授業における課題とデジタル教材の活用に関する考察』東京：教職研究・実践記要.
- 文部科学省（2017a）. 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』東京：開隆堂出版.
- 文部科学省（2017b）. 『We can! 1』東京：東京書籍.
- 文部科学省（2017c）. 『We can! 2』東京：東京書籍.
- 日本英語検定協会（2013）. 『小学校の外国語活動及び英語活動等に関する現状調査<国公立小学校対象>』  
[https://www.eiken.or.jp/eiken/group/result/pdf/syou\\_2012\\_12.pdf](https://www.eiken.or.jp/eiken/group/result/pdf/syou_2012_12.pdf)
- 日本教育情報化振興会（2014）. 『第9回 教育用コンピュータ等に関するアンケート調査報告書』  
<http://www2.japet.or.jp/info/japet/report/ICTReport9.pdf>
- 柳 善和（2009）. 「小学校でのメディア活用法」『英語教育』第58巻第8号, 16-22.
- 山本淳子（2010）. 「小学校英語教育におけるICTの活用について」『新潟経営大学紀要』第16号, 111-121.

# Practical Research on Utilizing We Can! Digital Teaching Materials Effectively

## – Focusing on the “My Summer Vacation” Unit.

Yuko SATO\* · Fujishige SOMEYA\*\*

### ABSTRACT

The purpose of this study was to propose the more effective use of digital teaching materials and teaching methods through the “My Summer Vacation” unit of We Can! 2 and to report the results of this practice. The study consisted of 156 6th-grade children, who studied the unit “My Summer Vacation” Data were obtained from a questionnaire, and analysis was performed using descriptive statistics. The results showed that many students are fond of using digital teaching materials in English class. They also showed that effective teaching methods helped children experience the joy of singing and pronunciation using these materials. In conclusion, pre- and post- follow-up were necessary to make effective use of digital teaching materials, and these materials can be used effectively in the classroom. The study not only showed the potential of digital teaching materials. It also revealed that teachers recognize the effects and issues of using these materials, such as using digital teaching materials tailored to the specific needs of children.